

## 池田文書の研究（十五）

池田文書研究会

### 賀川満載の書簡について

#### 一、賀川満載の略歴

満載は、産科の京都賀川家第四代、のち東京賀川家を興こす。天保元年三月二十四日、『地下家伝』第一書房では文政十一年（賀川満載の二男として京都に生まれる。幼名は甲三郎、称玄吾、字仲見、号は蘭臯。天保十五年五月五日山本亡羊入門し儒・医・本草を学ぶ。嘉永二年十一月典葉寮医生に補せられ、武蔵大塚に任ぜられる。嘉永五年五月、明治天皇の誕生に際して、父満崇と共に産科侍医を命ぜられる。安政三年二月若狭介に遷る。

明治元年二月、京都種痘所御用掛を兼勤。同年六月軍務官病院診療生を兼勤。明治二年二月軍務官治療方を兼勤。同年五月伏見種痘所取建御用を兼勤。明治三年京都府御用医となり、京都西新屋敷徴毒療養所取締御用を兼勤、また大津種痘所取建御用を兼勤。同年四月京都医学学校御用掛を兼勤。同四月十三日少典医に任ぜられる。同年初秋、広瀬元恭に入門。

同年十月、家督を弟満興に譲り、天皇に従って東京に移る。明治四年八月権少侍医に任ぜられるが、漢方医排除のため明

治五年五月九等出仕御葉室掛に降格。さらに、明治八年一月二等薬劑生、明治十年八月医員に任ぜられ、以後晩年まで医員として侍医局に勤務するが、明治二十四年五月十七日死去。享年六十二歳。

著書として、賀川家で発明した器械を解説した『産科器械用法書』『産科新式』などがある。

（参考文献・京都府医師会編『京都の医学史』、侍医寮編『転免物故履歴書』、山本榕室『日省簿』）

#### 二、満載の書簡

満載の書簡は九通あるが、すべて侍医局勤務時代のものとして推定される。

維新後の満載は、大正天皇をはじめ明治天皇の第一皇子から第四皇子、第一皇女から第七皇女まですべての親王・内親王の誕生の際、妊娠御用掛を勤めている。1〜3は明治十四年八月三日、第三皇女滋宮韶子内親王の誕生の際のもので生母・千種任子権典侍（花松権典侍）の出産前後の容体を詳しく伝えている。なお、滋宮は明治十六年九月、第四皇女章子内親王と前後して薨去。両内親王の拝診にあたった浅田宗伯はその責任を負って辞職を願ひ出るが許されなかったとされる。

（遠藤 正治）

池田文書——賀川満載書簡一覽——

書簡番号	発信年月日( )内推定	発信者名	受信者名	備考
1 1368	明治(14)年8月2日	賀川満載	池田大先生	花松典侍容体
2 1363	明治(14)年8月3日	賀川満載	池田大先生	花松典侍容体
3 1364	明治(14)年8月6日	賀川満載	池田大先生	花松典侍容体
4 1365	明治 年1月25日	賀川満載	池田謙斎	蕪3箇進呈
5 1366	明治 年7月24日	賀川満載	池田大先生	此品進呈
6 1367	明治 年8月4日	賀川満載	池田一等待医	一条殿奥方容体
7 1369	明治 年12月29日	賀川満載	池田大先生	墓地之義御尋
8 1370	明治 年7月4日	賀川満載留守人	池田謙斎	満載義本日当番
9 1371	明治 年2月3日	賀川満載留守人	池田謙斎殿御執事中	満載本日当番不在

1 明治(十四)年八月二日

一三六八 賀川満載 池田謙斎

花松<sup>①</sup>典侍容体、今朝ヨリ腰痛少々有之小便頻数ニ相成、聊か粘液之物有之候趣、御胎動常ニ不変被在候、位置等は少々下り胸下スキ候、併シ御催生ニては更ニ無之候、其余御異状等は不同候得共、今夜ヨリ宿番相始メ候様嵯峨<sup>②</sup>公御沙汰ニ付、小子宿直仕候間、前御容体之処御勘考ニ而、一応御參診被下候得<sup>③</sup>は、小子モ安心仕候、仍而此段申上候、頓首

八月二日午後七時

賀川満載

池田大先生

(1) 花松典侍……千種<sup>ちしよ</sup>任子。千種有任の長女。安政二年に生まれ、権典侍として明治天皇の第三皇女詔子内親王、第四皇女章子内親王を出生するが、両内親王とも夭世。昭和十九年没。

(2) 嵯峨公……嵯峨<sup>さゝま</sup>實愛。文政三年生。権大納言。反幕派公卿の中心として活躍。議定に任せられ、内国事務総督・刑部卿となるが、明治十四年隠退。詔子内親王出生の際御用掛を勤める。明治四十二年没。

(3) 詔子内親王出生時の書簡で、明治十四年を推定される。

2 明治(十四)年八月三日

一三六三 賀川満載 池田謙齋

花松典侍容体、

昨夕申上候後先同様之中、昨夜は安眠も不出来、時々趾骨辺ヨリ陰部え陳痛有之、小便も度々少々粘液物之中え桃花色帯候物下り候趣、愚考にて引続キ急御催生ニ相移り候とも難斗候間、御所勞中恐入候へ共、一応今朝御參診奉願候也

八月三日午前八時前 満載

池田大先生

御催生ニ付大至急御出頭有之度候也、

賀川満載

池田大先生

(1) 前簡に続く書簡で明治十四年。留子内親王の出生は八月三日午後四時三十分。

3 明治(十四)年八月六日

一三六四 賀川満載 池田謙齋

花松典侍御容体、

昨夜安眠、水便昨一晝夜五回、乳張は大ニ快氣張痛止ム、今朝下腹部ニ而痛アリテ大便下痢ス、二行但シ七時九時過 水瀉ニ而は無之軟柔也、少シク悪寒之氣味アリ、下物并子宮縮少ニは異

状ナシ、全ク時候ニさわり候ト奉診候、脈少シク進ム、微熱アリ、左之方ヲ調与ス

① コロンホ丁幾 二十滴

② メンタ水 二勺

③ 単オヒユム丁幾 五滴

④ 単舍 二勺

⑤ 餉水 三勺

一日分三回分用、右之通り容体候間、御高案之上御參診奉願候也、小子御參診迄御待申上候苦ニ奉存候得共、可驚容体トモ不診、且又昨夕御噂も有之候間、退出仕候間、此段御承引可被下候也、頓首

⑥ 八月六日午前十時 賀川満載拜

池田大先生

閣下

(封簡表)

池田一等待医殿 御産所賀川満載

花松典侍容体書入平信

(封簡裏)

八月六日午前十時

(1) コロンホ……コロンボ。アフリカ産 *Jateorhiza columba*

の根。苦味健胃整腸劑。

(2) メンタ……ハッカ *Mentha*、ハッカ油とし鎮痛解熱利胆薬となる。

(3) 単オヒユム……アヘン *Opium*、鎮痛鎮痙薬。

(4) 単舎……単舎利別。シヤリベツ。

sharbat (アラビア語)。濃厚糖液剤。

(5) 餹水……蒸餹水。

(6) 前簡につづき明治十四年と推定される。

4 明治 年一月二十五日

一三六五 賀川満載 池田謙斎

拜啓仕候、愈御清適奉大賀候、然は此蕪三箇甚夕輕少之至リ御座候得共、西京ヨリ参リ候ニ付進呈仕候、御笑納被成下候得は大慶不過之候、草々頓首

一月廿五日

賀川満載

拜

池田謙齋殿閣下

5 明治 年七月二十四日

一三六六 賀川満載 池田謙斎

拜啓、大暑之候愈御清榮珍重ニ奉大賀候、然は此品甚輕少之至奉存得共、暑中御伺之印迄進呈仕候、御笑留被下候得は大慶之至ニ奉存候、先は暑中得貴意度、草々頓首

七月廿四日

賀川満載拜

池田大先生閣下

尚々以參御伺申上候筈之処、暑儀之段平ニ御仁免可被下

候也

6 明治 年八月四日

一三六七 賀川満載 池田謙斎

一条殿奥方御容体、

昨朝御參診後御目覚御氣分佳シ、食一椀粥也、味佳シ、昼食同様二椀鶏卵一箇味佳ク好ム方、折々安眠、午前十一時小便二合斗カテールにて取、タン白分アリ、故ニシキダリス葉四氏、熱湯三<sup>③</sup>、浸出フロム加里四十五氏、硝酸加里二十氏、単舎一昼夜量、右調献候事午後四時也、下物今朝<sup>④</sup>先ッ少シ、午後六時五十分体温<sup>⑤</sup>三十七度八分脈点八十二、大便通し之心持ニ而今ニナシ、渴キ頭痛等は正午ヨリ止ム、午後三時頃ヨリ胸下之厭重ノ心持アリ、御惣状先佳方御平穩ニ相伺候、此段申上候、尚御參診奉願候、頓首  
八月四日午前一時認

賀川満載拜

池田一等侍医殿

- (1) 一条殿奥方……右大臣一条實良夫人總子、あるいは海軍大佐一條實輝夫人良子か。または一條忠秀夫人順子か。
- (2) シキダリス……シギタリス *Digitalis* プマンノハグサ科の植物。葉が持続性強心利尿薬となる。
- (3) フロム加里……臭化カリウム *KBr*、鎮静作用がある。

7 明治 年十二月二十九日

一三六九 賀川満載 池田謙齋

御書拝見、如高示月迫御繁務御察奉申上候、然は歳末として粗品呈上候処、不存寄好物品御惠贈被下難有<sup>敬指</sup>拝納何共恐縮仕候、尚期拜眉奉萬謝候、即刻御礼御答申上候筈之処、折悪ク不在ニ付此段御仁免可被下候、先は御礼貴答迄、早々頓首

十二月廿九日

賀川満載拜

池田大先生閣下

尚々墓地之儀御尋、天王寺御拂下ケ上等老坪ニ付式円御極り候、其他同様ト相心得候、此頃は如何相成候哉早速問合申上候也

8 明治 年七月四日

一三七〇 賀川満載留守人 池田謙齋

口上

御手紙、壹通

右正ニ落手仕候、満載義本日当番ニ而留守中ニ付、明日迎入差出候節為持遣候也

七月四日 賀川満載留守人

池田謙齋様

9 明治 年二月三日

一三七一 賀川満載留守人 池田謙齋

証

一、御封書、壹通

右正ニ落手仕候、満載本日当番不在ニ付、帰宅次第申聞ケ候、早々以上

二月三日

賀川満載留守人

賀川之印

池田謙齋殿

御執事中

### 岩佐純の書簡について

#### 一、岩佐純の略歴

純は、幼名は又玄、字は仲成、号は黙齋。天保七年五月一日越前福井に藩医岩佐玄珪の子として生れる。はじめ藩の医学所・濟世館に学ぶ。安政三年玄珪の跡を継ぎ表御医師、高百石となり、玄珀と改名。江戸に出て坪井芳秋に入門して蘭学を学ぶ。安政五年佐倉の佐藤尚中に師事。万延元年閏三月奥御医師となり、同年五月藩命で長崎に赴きポンベにつく。文久二年五月御匙医師となる。慶応元年五月再び長崎に赴きボードウインに伝習を受ける。慶応二年春獄公に従つて上洛、天皇不例につき、陪臣として異例の参内をするが、拝診には至らなかつた。

池田文書——岩佐純書簡一覽——

書簡番号	発信年月日( )内推定	発信者名	受信者名	備考
1	361 明治 年3月26日	純	謙斎	御実父御患御帰省
2	359 明治(16)年3月7日	岩佐純	池田一等侍医	植物御苑へ行幸
3	1298 明治 年2月23日	岩佐純	池田謙斎	聖上今朝未拝診
4	360 明治 年10月2日	岩佐純	池田国手	永田甚七一診
5	363 明治 年11月17日	欠	欠	貴官方成殿代番
6	358 明治(21)年11月23日	岩佐純	池田長官	侍医数名定て
7	364 明治 年2月17日	岩佐純	池田謙斎	宮御容体、萩原風邪
8	1299 明治 年3月19日	岩佐純	池田局長	平野好徳宮中
9	1300 明治 年10月19日	純	池田	新樹典侍在再不宜
10	1301 明治 年6月14日	岩佐純	池田謙斎	晩餐呈上仕度
11	1302 明治 年10月16日	岩佐純	池田局長	聖上昨日より
12	362 明治(30)年9月25日	岩佐純	池田局長	御降誕御首尾能

明治二年正月医学校創立取調御用掛を命ぜられ東下、相良知安とともに、ドイツ流の医学制度の採用に貢献する。同年五月学校権判事、七月大学少丞、明治四年一月大学大丞、七月文部大丞兼中教授、明治五年一月宮内省大侍医を拜命し文部中教授を兼る。明治八年一月官制改革により四等侍医、同年七月三等侍医、明治十年十月二等侍医、明治十六年五月一等侍医に累進する。

明治十七年四月ヨーロッパに渡り医術を研究、明治十八年五月帰朝。明治十九年二月官制改革により侍医に任ぜらる。明治三十年九月池田謙斎不在中侍医局長代理となる。明治三十一年宮中顧問官に任ぜられ、明治四十年男爵を授けられるが、明治四十年五月侍医を辞任。明治四十五年一月五日薨去、年七十八。

著書に『急性病類集』（明治六年）などがある。明治十六年、私立東亜医学校の設立に参画しその総理となる。明治十六年、

（参考文献・『福井県医師会史』、侍医寮編『轉免物故履歴書』）  
二、純の書簡

純の書簡は十二通を数える。純は明治初期大学にあつて、相良知安とともに医学制度をドイツ流に定める上で才腕を振つたことで有名であるが、性格温厚であり、その後は文部行政から離れて、晩年までの三十五年間はずっと侍医局にあつて治療一筋に生きている。局長に就任するよう勧められることがあつたが、これを固辞したとも伝えられる。

書簡の内容もほぼこの侍医局における勤務や病用に関わる

ものに限られている。明治天皇については、書簡三五九・一二九八・一三〇二にその容体などが報告されている。うち書簡三五九は明治十六年三月七日、新宿植物御苑への行幸前日のもので、端裏書きがあつて、当時の侍医の勤務日割りがわかる。

書簡三五八は、明治二十一年十二月渡邊悌二郎・岩佐登弥太・加藤照磨および片山芳林の四名が侍医あるいは侍医局勤務に採用され侍医局の増員がはかられた直前のもものと推定される。この増員に岩佐純らの働きかけがあつたことを伝えている。

(遠藤 正治)

1 明治 年三月二十六日

三六一 岩佐純 池田謙齋

御実父様御大患之旨ニ而急ニ御帰省被成候御由、嘸々御痛神萬々御察申上候、最早此程御発途ト奉存候、一寸御安否伺旁参上可仕之処、本日ハ当番ニテ不得其義御途上萬々御加養御兼行奉禱候、以書中御暇乞申上候、不悪

三月二十六日 純

謙齋様

(1) 実父……謙齋の父入澤健蔵。明治十三年一月十一日没、年七十二。

2 明治(十六)年三月七日

三五九 岩佐純 池田謙齋

前略、明八日植物御苑へ行幸被為在候旨、本日午後一時過突然被仰出候、右は過日来之御容体後ニも被為入候へは、前以一応御内沙汰御座候上御治定可被為在候義とも相考候へ共、何分昨日之御事、今日御治定被仰出候御次第故、何共致方無之候、併し今朝拜診之節御賜所は全御快被為在候御沙汰ニ付、格別御動じも不被為在とは奉存候へ共、餘り突然之事ニ而驚入申候、依之右之段貴官御心得迄ニ申上置候、若哉御見合ニ而も御願出之御勘考にも御座候へは何卒御出頭御取斗可被下候、右申上度此如御座候也

明番

三月七日 岩佐純

池田一等待医殿

(端裏書)

三日 謙齋

四日 方成

五日 正信

六日 岩佐

七日 高階

八日 盛貞

九日 謙齋

(1) 八日植物御苑へ行幸……明治天皇が明治十六年三月八日新宿植物御苑に行幸し鴨猟を行ったことをさす。なお、現在の新宿御苑が、信州高遠藩主内藤氏の江戸屋敷の地に完成したのは明治三十九年のことである。  
(2) 前注より明治十六年と推定できる。

3 明治 年二月二十三日

一一二九八 岩佐純 池田謙齋

聖上今朝ハ未拝診不仕候得共、昨夕ハ彌以御順宜ニ奉存候、  
今夕ハ方成殿拝診ニ相成候ニ付、貴官ハ乍尊勞明朝御拝診被  
下度、此段得御意候也

二月廿三日

岩佐純

池田謙齋殿

4 明治 年十月二日

三六〇 岩佐純 池田謙齋

永田甚七一昨日一診仕候処、老台御施療被成候よし、素り初  
診ニテ判然タラス候得共、病家頻ニ貴下へ御相談申具候様依  
願候ニ付書面ヲ以申上候、当時脹満甚局症之景況ハ認カタク  
大腸耄部一塊ヲ生スルハ分明ナルよし、往症ヲ以考ルニ著シ  
キ炎症ハナキカ如シ、新生物ナルヤ或ハ慢炎滲出物ナルヤ

詳ナラス、然トモ大塊物始終腸管ヲ妨圧シ、カタルヲ生スル  
ナランカ、此度モ圧迫ニ罹ル一部ニカタルヲ生スル処へ宿屎

等梗塞ニ其一部大ニ煩絶セラレ脹満甚キニ至ルナラスヤ、然  
トキハ第一刺戟有カノ灌腸法ヲ施シ外用ニハテレピン等ヲ塗  
擦シ即宿屎ヲ除去スルノ試案如何可有之哉、前日小生如此一  
經驗アリ、意外之良結果ヲ得シ事アリ、緩和消炎之方法八十  
分既御試被成候様相見候ニ付弊案試述致候、素り匆卒一診決  
而不得当否宜御取捨可被下候、再四病家より被責候ニ付不得  
止呈一書候、餘ハ付拜晤候也

十月二日

岩佐純

池田国手侍史

5 明治 年十一月十七日

三六三 岩佐純 池田謙齋

明日ハ貴官方成殿御代番ニ相成候旨拜承仕候、就而ハ明日八  
時三十分御出門ニテ吹上御苑へ行幸被為在候処、又弁当迄備  
候筈ニ付、多分還幸ハ薄暮ニ可及候事ト奉存候、然処下官無  
拠他ニ急候儀之筋アリ、夕刻迄二面識ヲ得サレハ甚不都合次  
第二而當惑罷在候、依之甚願上兼候得共、四時過迄ニ吹上之  
方へ御出勤被下、於彼方御交代被下候義ハ相成間敷哉、幸ニ  
御許容被下候得ハ誠ニ難有、不得止事件ニ付無拠願試候段御  
諒察奉稀候、尤四時過ニ而宜ク、決而夫より早キニハ不及義  
故、此段承知被下乍御手数御一揮ヲ奉煩候也



十一月十七日

再啓青山御所ハ明朝竹内殿伺ニ相成筈ニ付、為御含迄ニ申上置候也

6 明治(二十一)年十一月二十三日

三五八 岩佐純 池田謙齋

拜啓、彌御安康奉拜賀候、陳ハ今般侍医数名定而新拜命ニ可相成義ト奉存候ヘバ、何卒兼而内願仕置候一件御許容被下候ハ、無上之恩賜ト厚ク奉感佩候、萬一志願相対候ハ、明宮御方へ御採用被成下候様奉願度、此段只管御含被下候様内願仕候、大高階も追々真面目之徴も相見候由ニ候得ハ到底望も無之事故、此際四名御申立被下候ハ、局ニ於てハ甚好都合ト奉存候、何卒老名位ハ手計之人無之候而ハ甚指間多可有之と奉候、餘ハ付拜容、草々頓首

十一月廿三日

岩佐純

池田長官殿

7 明治 年二月十七日

三六四 岩佐純 池田謙齋

日々御參診尊勞奉存候、陳ハ宮御容体彌以御順快、今朝杯ハ別而御氣先も御宜方ニ被為入候、萩原も此節風邪ニ而昨夜帰宅加養罷在、小生も一昨夜来胃腸カタル症ニ而頗ル困難ヲ極メ罷在、就而ハ今夕ハ萩原氏參上之筈ニ候得ハ、誠ニ乍御苦勞午後二時頃より夕刻迄御詰合被下候様相願度、小生も甚全身怠惰腹痛ニ而困却、一応退出加養仕度候間此段相願候也

二月十七日

岩佐純

池田謙齋様

(1) 萩原……萩原三圭。明治二十年一月侍医局勤務、翌二十一年五月侍医となるが、明治二十七年一月没、年四十八。

8 明治 年三月十九日

一一九九 岩佐純 池田謙齋

拜啓、陳ハ平野好徳宮中被許曳杖候義、御頂被申候ハ令授与旨桐命婦より被申渡候間、其旨平野好徳へ通知仕置候、此段御承知迄ニ得貴意候也

三月十九日

(1) 侍医数名……明治二十一年十二月八日渡辺悌二郎と岩佐登弥太が任医に、加藤照磨および片山芳林が侍医局勤務にそれぞれ任命される。本簡はこの直前と推定される。  
(2) 大高階……侍医高階経徳。経徳は明治二十二年三月病没。

池田局長殿

岩佐純

(1) 平野好徳……文政七年近江坂本に生まれ、典藥寮医師となる。明治元年、二年東京行幸に供奉。少典医、葉劑生、医員を経て明治十九年侍医局勤務となり、明治三十一年、七十五歳のとき退職。明治三十三年没。

9 明治 年十月十九日

一三〇〇 岩佐純 池田謙齋

爾来ハ懸違未得拜芝、過日ハ御平安被成御帰京奉大賀候、長々御苦勞至極ニ奉存候、未御尋問も不申上疎懶之至千萬奉謝候、陳ハ新樹典侍旧臘来兎角在善不宜二付、下宿被致專安靜ニ保養候処、近来悪方ニも無之候得共、ヒステリセ諸症殊ニ時々頭痛発頭、何分充分之輕快ヲ難得、大ニ遷延当惑罷在候、何卒甚遠路乍御苦勞兩三日御繰合ヲ以御診察被下候様相願度、其旨御同人へも申入置候間、御都合次第奉願上候、当時処方ハ臭劑サフラン丁幾莫若エキス兼用仕候之事ニ而取扱居候間、尊案御垂示奉願候、宿所ハ今戸細川邸下隣地ニテ高倉邸ト記名有之候、何れ其中拜晤萬々詳悉可仕候得共、不取敢前文相願度、草々頓首

一月十九日

純拜

池田老壹侍史

(1) 新樹典侍……典侍高倉壽子。侍従高倉永胤の娘。天保十一年九月生まれ、昭和五年一月没。

10 明治 年六月十四日

一三〇一 岩佐純 池田謙齋

拜啓、薄暑之候益御安康奉拜賀候、陳ハ弊屋半落成甚狭小御窮屈之至り御座候得共、晚餐呈上仕度候間、来ル廿日午後四時御来車被成下度、此段御案内申上候、敬具

六月十四日

岩佐純

池田謙齋殿

侍史

尚々御諾否乍御手数来ル十七日中本局高橋良尚迄御一報相願候也

(1) 高橋良尚……明治十九年より侍医局属。

11 明治 年十月十六日

一三〇二 岩佐純 池田謙齋

拜啓、陳ハ聖上昨日より御加減御丸葉差上候処、昨夜迄之御大便ハ矢張御軟便ニ而御多量、今朝ハ御中量候、更ニ御水瀉

之御気味ハ不被為入、只朝之分毎々御少量之処、今朝ハ御中量ニ被為入候丈之御違ニ御座候、御小便ハ千四百〇ニテ比重八一〇ナリ、過日御多量之時も一〇ナリ、此段御含迄ニ申上置候、

皇后陛下昨午後七時拝診被仰出候候処、御偏頭痛御強ク御嘔氣被為在候ニ付、御仮床ニ被為成候、御熱氣ハ更ニ不奉伺、昨日午後御庭へ被為成寒冷之風ニ御觸被遊候よし故、全ク右ニ因ル神堂性御頭痛ト奉伺候、此御容体ハ是迄時々被為在候御事ニ而、御手当指上候処、御格子前ハ余程御軽快、今朝拝診候処、殆ト従前之通り位之御頭痛ニ而、本日丈御仮床ニ而、御用心被為遊候之御沙汰ニ候故、全ク御一時之御事ト奉伺候、此段御含迄ニ得貴意置候、拜具

十月十六日

岩佐純

池田局長殿

12 明治三十年九月二十五日

三六二 岩佐純 池田謙齋

謹啓、兎角不整之候彌御安康、爾来彌以御順快之段萬々奉賀候、陳ハ昨日ハ御降誕御首尾能被為在候段恐悦ニ奉存候、乍少々御欠点為宮家遺憾ニ奉存候、昨日幸岡氏へ侍医局ニ而面晤候ニ付委曲申上置候、御聞取被下度候、貴官ニも彌御快方ニ付来廿七日頃ハ御帰京ニ大略御豫定之由、誠ニ不堪御同慶奉存候、何れ不日拝晤萬々拝話可仕候、右得貴意度迄、草々

拜具

九月廿五日

池田局長殿

岩佐純

尚々此上萬々御注意御愛護之程不堪御禱候、必貴答ハ御断申上候、再白

(封筒裏)

相州鎌倉長谷新宿

(消印)

相模鎌倉三十年九月二十五日ホ便

池田侍医局長殿親展

(封筒裏)  
宮内省侍医局

岩佐純

(印)  
宮内省

(1) 御降誕……多喜子内親王貞宮の明治三十年九月二十四の誕生。明治三十二年一月十一日薨去。